長崎市柿泊町方言の比喩語について

愛宕　八郎康隆

はじめに

1．調査対象地：柿泊町は、旧長崎県西彼杵郡福田村柿泊郷の地であって、現在は長崎市に属している。市の西端部に位置し五島灘に面している、農業を主とする兼業集落である。農業もみかん作りを主業とし、米、野菜は自家用の域を出ない。かつては、牛の飼育や養鶏も盛んであったが、現在は止んでいる。代って、市内への通勤者が増えている。交通は、長崎市街地へのバス便が日に２０便。戸数は１５０戸、人口は約６００人で、宗教は全戸浄土真宗である。

2．調査年月日時：１９９２年１２月１９日午後１時３０分～４時、
１２月２０日午後２時～４時

3．話者：尾上千代子　昭和９年２月１１日生（５８才）

4．調査者・調査場所：愛宕　八郎康隆、話者宅の座敷

5．調査方法・調査時の様子：調査票に基きながらも、適宜必要な発言をまじえた。話者が地元の知人ということもあって、終始、のびのびとうちとけた雰囲気で調査することができた。

（以下、比喩語でない回答事象については、＜　＞で示す。新古について回答のないものは、無記録とした。）

I　《 自然現象 》

1．日照り雨＜ヒナタアメ＞

2．入道雲＜ニュードーグモ＞

3．旋風　タツマキ（龍巻き）＜名＞中・老年層　新　中　旋風を龍が舞い昇る様に見立てたものと思われる。

4．霜柱＜シモバシラ＞

5．つらら＜タロメ＞

6．北斗七星　ホーガクボシ（方角星）＜名＞中・老年層　古　中　北の方角の拠りどころとしたことによると思われる。

7．昴　　この星そのものを知らない。

8．流れ星＜ナガレボシ＞

II　《 動物 》

9．かわはぎ　ゴーペー　＜名＞　中・老年層　古　中　頭部の奇異なことを強調

した命名で、コーベ（頭）に発するものと考えられる。

10. ひらめ　ベタ　<名>　中・老年層　古　中　話者が「ベターット　ヒラカケン」と説明するように、擬態発想の命名と考えられる。

11. ひきがえる<ドンク>

12. 青大将　ネズミトリグチナワ（鼠捕りくちなわ）<名>　中・老年層　古　中　鼠をよく捕る蛇の意。「クチナワ」は、朽ち縄、口縄の意の比喩。

13. とかげ<トカゲ>

14. かまきり　オガメ、オガメタロー（拝め、拝め太郎）<名>　中・老年層　古　中　かまきりの前脚を顔の前まで持ち上げる動作を、人の神仏を拝む姿になぞらえての命名である。

15. みずすまし<ミズサマシ>

16. きつつき　キタタキ（木叩き）<名>　中・老年層　稀　古　中　くちばしで幹に穴をあける動作を木を叩くと発想した造語。

17. せきれい<セキレー>

18. ふくろう　ネコドリ（猫鳥）<名>　老年層　古　中　ふくろうの顔を猫にたとえた造語。

III 《植物》

19. 馬鈴薯　オランダイモ、オロシャイモ（和蘭陀薯、ロシア薯）<名>　老年層　稀　古　中　それぞれ、和蘭陀、ロシアから渡来した薯という発想の造語と思われる。

20. とうもろこし　トーキビ（唐黍）<名>　中・老年層　古　中　外来の黍の意。

21. いんげん豆　アクシャマメ<名>　中・老年層　古　中　「アクシャ」の出自は不明だが、話者は、「アクシャウツゴト　ヨンニュー　トルッケン。」（どうにもならない程たくさんとれるから。）、この名があるという。また、この豆に関して、「ナルグラー　トルグラー。」（豆がなるが早いか、採るのが早いかの競い合い。）との言いぐさがあるという。

22. そら豆<ソラマメ>

23. 木くらげ　ミミナバ（耳なば）<名>　中・老年層　古　中　「ナバ」は茸の意。木くらげを、耳のようなきのこと見みなした比喩語。

24. げんのしょうこ　イシャゴロシ（医者殺し）<名>　老年層　古　下　この薬草が胃病によく効くことから、医者にかかる人がおらなくなり、医者がいきづまるという発想の造語。

25. どくだみ<ドクダンソーン

26. いたどり<話者、この植物を知らない>

27. からすうり<カラスゴイゴイ>

28. すみれ　ケンカグサ（喧嘩草）＜名＞　中・老年層　古　中　他地に「スモートリグサ」が見られるように、すみれを使っての引き比べに子どもが興じたことによる命名である。

29. 春蘭＜ヤマラン＞

30. 母子草＜ハコベナ＞

31. ねむの木＜ネンブーノキ＞

Ⅳ《性向》

32. 熱しやすく冷めやすい人　シリヤケ（尻焼け）＜名＞　中・老年層　古　下　「シリヤケ」は、尻に火がついたように、一事に集中できない人のことを言う。

33. あわてん坊＜オッチョコチョイ＞

34. 動作の鈍い人　ヌッタモ　ハゲタモ　ワカラン　ヒト（塗ったも禿げたも解らない人）　老年層　稀　古　中　のろのろしていて、しかも仕事にけじめがない人を、「塗ったも禿げたも、見た目にはっきりしない＜壁塗り仕事＞ような人」と表現する。

35. 嘘つき　センスラマンミツ（千すら万三つ）＜名＞　老年層　稀　古　下　「センスラ」は、千すべて空（から）、嘘の意で、「マンミツ」は、万に三つしか本当のことを言わないの意。つまり、たいへんな嘘つきということになる。

　ちなみに、当地では、「クジガ　スラジャッター。」（籤がからだった。）のような「スラ」が見られる。

　なお、当地には、嘘つきを表す「ダマシクリ」、「スラゴトクリ」などがある。

36. ほらふき　ウーブロシキ（大風呂敷）＜名＞　中・老年層　新　下　とくに説明するまでもない。

37. おしゃべり　チャンベラ、オチャンベー＜名＞　中・老年層　新　下　両語とも、多分に擬態発想の趣が看取される。

38. 冗談言い＜ゾータンイー＞

39. 口先だけの人　ウドンヤノカマ（うどん屋の釜）＜名＞　老年層　稀　中＜話者によれば、聞いたことはあるが、自ら使うことはないという。＞うどん屋の釜の中には、湯だけしかない。その「湯ばかり」に「言うばかり」をかけた造語。

40. とんちんかんなことを言う人　テンニ　アタラン　コトー　ユー　ヒト　（点に当らないことを言う人）　中・老年層　稀　古　中　焦点にぴたり当らないことを言う人の意。

41. のらりくらり煮えきらない人＜ニエキランヒト＞

42. 怒りっぽい人　ハラカキボー（腹掻き坊）＜名＞　中・老年層　新　下　怒り

に堪えかねて、腹を掻きむしる人という発想の造語。

43. 気むらな人　オテンキモン、テンキヤ（お天気者、天気屋）　<名>　若・中・老年層　天気の変わりやすいことを気むらな人の様子に結びつけている。

44. 泣き虫<ナキベス>

45. おてんば娘　オナハチ（女八）<名>　中・老年層　稀　古　下　おてんば娘を、八幡太郎（源義家）に喩えて、女八幡太郎とし、その略形の女八幡（オナゴハチマンあるいはオンナハチマン）を出自としての「オナハチ」と考えられる。

46. 腕白坊主<ヤダモン>

47. 出しゃばり　シーラノサキバシリ（籾の先走り）<名>　中・老年層　古　中　稲の穂先には実の入っていない籾、つまり籾が、きまって出る。そこから、とかく実力のない人間で出しゃばりのことを「シーラノサキバシリ」と言う。

48. どこへでも顔を出す人　デベソ（出臍）<名>　中・老年層　新　下　出たがり屋を出臍に喩えた造語。他に「ハッテンカ」（発展家）とも言う。

49. 家にこもって外出しない人　アナガネ（穴蟹）<名>　中・老年層　古　下　家にこもって外出しない人を、穴の奥にこもっている蟹に喩えた造語。なお、留守番するを、当地では、「キョーワ　ハンドガメシトットヤ　モン。」（今日は水がめしているのだもの。）のように言う。「ハンドガメ」（水がめ）を「ミソダル」（味噌樽）に置きかえて言う場合もある。

50. 小心者　ノミンキンタマ（蚤の金玉）<名>　中・老年層　下　小心者を、ユーモラスに小さな蚤の金玉に喩えたもの。当地でも、小心者は金玉が小さいと評している。

51. 内弁慶<ウチベンケー>　当地では、「ウチベンケーノ　ソトスボミ」とも言う。

52. 人づきあいをしない人、社交性のない人<ヒトドーカモン>（人遠い者）

53. 妻に対して頭の上がらない男　シリシカレ（尻敷かれ）<名>　中・老年層　下　妻の言うままになる男を妻の尻に敷かれる男とした比喩語。

54. けち　ニンギ（握り）<名>　中・老年層　下　けちを、金品を握って放さない人と発想した造語。

55. 欲張り<ヨクバリ，ヨクン　ツヨカヒト>

V 《食生活》

56. 大食漢<ウーメシグイ>

57. ぼたもち<ボタモチ、オハギ>

58. 砂糖味が薄い　サトヤノトーカ（砂糖屋が遠い）<形>　老年層　稀　古　中　おはぎとぜんざいなどを作った時、砂糖味が薄かった場合などに用いる。その

意は、今、おはぎの甘味の薄かったのは、足りない砂糖を買い求めようにも砂糖屋さんが遠いので、手当てができなかったというわけで、当初は、作り手の言いわけのことばであったが、現今では、次のように食べ手側の評言に用いられている。「カーサン　キョーントワ　チート　サトヤノ　トーカゴタッ　ネー。」（お母さん　今日のおはぎはちょっと砂糖味が薄いみたいねぇ。主人→妻）

59. 塩味が薄い＜シオアジノウスカ、サブナカ＞

60. 大酒飲み　イッシュードックリ（一升徳利）＜名＞　中・老年層　中　一升酒を飲むような酒豪を一升徳利に喩えたもの。

61. 酒に酔ってくだをまく＜スイキョー＞

62. 酒に酔って顔が赤くなる、そのさま　ベンガラ（紅柄）＜名＞　中・老年層　中　酒飲みの酔った赤い顔を赤色顔料のベンガラに喩えたもの。

VI 《動作・様態》

63. 恥ずかしくて顔が赤くなる、そのさま　＜ヤッシェモナカー＞

64. どしゃ降りの雨　バケツニ　クンジ　イッカクルゴタル　アメ。（＜水を＞ばけつ汲んでかけるような雨。）中・老年層　稀　中　単純な比喩語形としてのことばはなく、文形で表現する。

65. ずぶ濡れ・びしょ濡れになる、そのさま　ジゾーヌレ（地蔵濡れ）＜名＞　老年層　稀　古　中　野ざらしの地蔵が、身にまとうものもなく、もろに濡れる様を喩えにしている。

66. 服装がだらしないさま＜ジョンダレ＞

67. 髭がのび放題なさま＜ブショーヒゲ＞

68. 厚化粧をしている人　シラカベ　ヌッタゴタル　ヒト。（白壁を塗ったような人。）　中・老年層　中　厚化粧の女性を白壁をぬりたくった様に喩えたもの。

69. 背丈の高い人　クモツッポカシ（雲突き破り）＜名＞　中・老年層　中　背丈の高い人を、ややユーモラスに雲に穴をあける人と発想している比喩語。

70. 出びたい　サイコンズツ（才小槌）＜名＞　老年層　稀　古　下　ひたいと後頭部が突き出ているのを、才小槌の形（両方に突出している形）に喩えたことば。「デボチン」とも言う。

71. 汗がひたいから流れ落ちる　アセガ　メニ　ハイルゴト　ズル。（汗が目に入るほど出る。）中・老年層　古　中　単純な比喩語形としてのことばはなく、文形で表現する。

72. 目を丸くする　メバ　チョクンゴト　ナラカス。（目を猪口＜盃＞のように丸くする。）驚いて目を丸くする様を盃のように丸くと喩えている。

73. 口をとがらす＜クチバ　トンガラカス＞

74. 焦げ臭いにおい<コガルン　モンノ　ニオイ>、<コガレクサカ>（焦げ臭い）<形>

75. 遠廻り（をする）<ウーマワリ>

76. 末っ子　シリッコ（尻っ子）<名>　中・老年層　古　中　最後尾の子の意の造語。

77. 一生懸命頑張る　ガマダス（我慢を出す）<動>　老年層　稀　古　中　「ガマダス」は、我慢を出すを出自とする、比喩的造語。

〔追補〕

以下には、統一的調査で得られたもの以外の比喩事象（比喩語、比喩の文表現）を記す。

[Ⅰ]．比喩語

1．ィエダ［ｊｅｄａ］（枝）腕のこと。『和名抄』に、「肢、衣太」の記載がある。

2．スジ（筋）種籾のこと。「スジ　マキニ　イッター。」（種籾を播きに出かけた。）のように用いる。「スジ」は「スジモミ」とも言う。「スジ」（筋）には、人間の血筋へのなぞらえが考えられよう。

3．ホケダシ（火気出し）息ぬきのこと。息ぬきを、やかんなどから出る湯気に喩えたもの。

4．クサブ、クサビ（楔）きゅうせん（魚名）のこと。この魚の尾びれのところが、楔の形に酷似していることからの、比喩造語と考えられる。

5．ゴッチン（ごっちん）半生炊きのごはんのことで、その芯が歯に当たる趣を擬態語にしたもの。

6．カベチョロ（壁ちょろ）やもり、壁をちょろちょろと這い歩く様を擬態語にしたもの。

1～6は、いずれも名詞であり、使用者層は、4、6（若年層も）以外は、いずれも中・老年層。新古では、1、2が古とされ、品位は、いずれも中である。

[Ⅱ]．比喩の文表現

1．ナベン　ソコンゴツ　マックロン　ナッテ　キテー。（空が）まるで鍋の底のようにまっ黒になってきて。（老女）

2．アシャー　ビャーランゴツ　シチー。（痩せて）脚はまるで薪のようにして。（老女）

3．スジノ　ハラキャーチ　サー。（足の）筋が腹を立てて（つまり、捻挫して）ねぇ。（老女）

4．トージンノネゴトンゴタル。まるで外人の寝言のように（何を言っているのか）さっぱりわからない。（中女）

5．スズムシン　ジンタン　フクマシェタゴタル　コエデ　ウタワス　バイ。（あの人は）まるで鈴虫に仁丹を含ませたようなさわやかな声で歌われるんですよ。（老女）

6．シオトキシラズノ　ゴーナ　フリー。潮時知らずのやどかり拾い。（老女）これは諺の表現。潮の満ち干の加減を知らない者は獲物としてやどかりを得るくらいにおわるの意で、何事もタイミングが大切という諭しの表現。

1（自然現象）を除いては、すべて人にかかわる表現である。

以上、柿泊町方言における比喩語（44語）と若干の比喩の文表現（11文）を見てきた。比喩語を、その造りから見るに、かなり多彩である。すなわち、単純一語の名詞のもの（［Ⅰ］1．ィエダ、2．スジ、4．クサブ、／9．ゴーベー）、擬態発想の単純語（10．ベタ、［Ⅰ］5．ゴッチン）、動詞命令形、連用形からのもの（14．オガメ、54．ニンギ）、名詞＋名詞のもの（18．ネコドリ、23．ミミナバ、49．アナガネ、他19、20、21、28、43、62、45、60、76、12）、名詞＋の＋名詞のもの（39．ウドンヤノカマ、他47、50、70）、名詞＋（を）＋動詞連用形のもの（16．キタタキ、24．イシャゴロシ、他32、42、69、77、［Ⅰ］3）、名詞＋（が）＋動詞連用形のもの（3．タツマキ、65．ジゾーヌレ）、名詞＋（に）＋動詞連用形のもの（53．シリシカレ）、動詞連用形＋名詞のもの（48．デベソ）、名詞＋（の）＋形容詞のもの（58．サトヤノトーカ）などが見られる。

なかで、名詞＋名詞や名詞＋（を）＋動詞連用形の造りに、比喩語が集まりやすく見受けられる。

比喩語の「ジゾーヌレ」や「クモツッポカシ」、比喩文の「スズムシン　ジンタン　フクマシェタゴタル　コエデ　ウタワス　バイ。」を見るにつけても、その発想の自在さにうたれる。これは、地方人として方言に生きる人々の連想・想像の能力の豊かさを物語るものであろう。加えて、比喩語，比喩文にとかくなにがしかのおかしみ、洒落を構える傾向のあるのも注目される。それでいて、一方には「シーラノ　サキバシリ」とか「シオトキシラズノ　ゴーナ　フリー。」などのように教訓的な発想をもよくし得ているのである。

総体、方言の比喩は、文学世界の比喩の雅に対して俗ではあるが、そこには生活の真実がこもっていて、えも言われぬ生活臭を放っていると言えよう。

（あたご　はちろうやすたか　活水女子大学文学部）